高山　善右衛門 ―ふるさとに豊かな大地を―

（外交官になるための勉強を続ける道と、角田に帰って家業をつぐ道、どちらを進めばいいのか）

ふるさとをはなれ、東京の大学で学んでいた善右衛門の心には、迷いがありました。角田に帰って家の仕事をついでほしいという父からの手紙が何度も届いていたのです。地主であり町の世話役をし、人々のために働く父の姿を見て育った善右衛門は、その仕事の尊さも、よくわかっていました。しかし、大学で学び続けたいという気持ちも強くなりました。そして、ついに角田に帰ることを決心したのでした。善右衛門が二十二歳のときでした。

角田に帰った善右衛門が見たものは、生活に苦しむ町の人々の姿でした。中でも、人々を悩ませていたのは、水の問題でした。そのころの角田は水に恵まれず、井戸をほってもよい水はなかなか出ませんでした。町場の多くの家では、水売りから飲み水を買って生活していました。農家の人々は、「ため池」から水を引いて農業用水にしていたので、日照りが続くと水不足のために、稲はかれました。田に流す水をめぐって、人々の間には水争いも起こりました。

明治二十三（一八九〇）年、町議会議員となった善右衛門は、どうにかして町の人たちが苦しんでいる水不足の問題を解決したいと思うようになりました。そして、阿武隈川から水を引く計画について真剣に考えました。阿武隈川は、角田の町を流れる大きな川で、一年中、豊かな水をたたえています。ところが、町より低いところを流れているため、川から田畑に水を引くことはできませんでした。そこで用水を作り、土地の高低差を利用して水を流すことを考えました。となりの丸森町の上流から、全長六キロメートルにわたって用水を作る計画は、父の代にも議会で話し合われていました。しかし、

ため池…田畑の水や防火用水などをためておくための池。

用水…飲み水や田畑に引く水、洗濯、防火など生活に使う引き水。

当時の技術では工事が難しく、ばく大なお金がかかるということで実行されなかったのです。善右衛門はくる日もくる日も考え続けました。

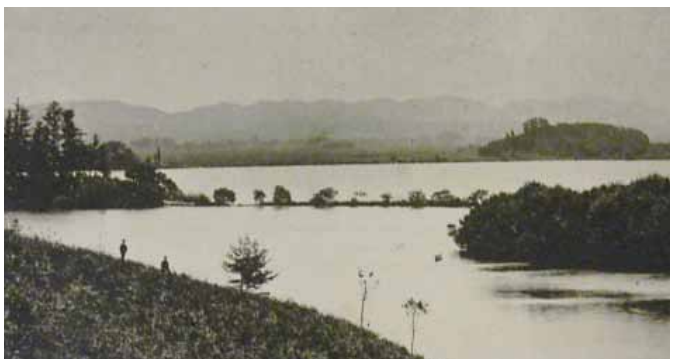
善右衛門は、その計画に再び目を向けました。今の技術なら工事が実現できるのではないかと考え、用水について手をつくして調べました。専門家にも相談し、費用の面でも技術的にも工事が可能だという確信をもつようになりました。

（用水を作れば、人々の暮らしはきっとよくなるだろう。工事には多くの費用が必要だが、米がたくさんとれるようになれば、十分返せるはずだ。用水を作ることは、町の発展につながる。わたしは、この用水を完成させるために、自分のすべての力を注ごう）

そう決心した善右衛門は、多くの人に声をかけ、用水工事への理解を求めました。町議会でも、用水の必要性について熱心にうったえました。ところが、工事への反対は大きいものでした。町の人々は、長い間使ってきた大切なため池をなくすことへの反発や失敗したら借金が残るのではないかという不安などを善右衛門にぶつけてきました。

「ご心配はよく分かります。しかし、いろいろな調査を重ねた結果、私は工事の成功に確信をもっています。みなさん、町に用水ができたときのことを考えてみてください。水くみの苦労はなくなります。田畑には、いつでも水が引かれ稲が青々と育つでしょう。使わなくなるため池は、新しい田にすることができます。田が広がって米がたくさんとれるようになれば、暮らしが楽になります。わたしの夢は、角田を豊かな町にすることです。用水は、そのための大きな一歩となることでしょう。」

そんなときでも、善右衛門は自信をもっておだやかに語り続けました。



干拓前のため池の大沼（手前が赤沼）（角田市）

また、善右衛門は、工事の方法や資金について、人々にわかりやすく説明しました。どんな質問にも耳を傾け、ていねいに答えました。話を聞いた人々は、やがて一人また一人と心を動かされていきました。明治三十七（一九〇四）年には、四十三名の会員が集まって『上水期成同盟会』を作りました。

ある日、町長が善右衛門に工事が成功しなかったらどうするつもりかと聞きました。善右衛門はしばらく考えてから、その場合は自分が財産を全部出しておわびをし、町の人たちに負担をかけるようなことはしないと答えました。それを聞いた町長はさっそく議会を開き、ついに工事の計画は議会で認められ、動き出しました。

しかし、明治三十九（一九〇六）年も大凶作に苦しんだ前年に続き天候不順のため、町には食べる物のない人があふれ、重苦しい空気が町全体をおおっていました。善右衛門は、食べ物がない人たちのために、自分の家の米でおかゆをたいて配りました。また、種もみがない人には、山形から取りよせて配りました。

こうした中で、町が大変なときに用水工事どころではないと、計画に反対する者も出てきました。その人々に向かって、善右衛門は言いました。

「今は、食べるものを買うお金がない人に、仕事をあたえることが必要です。工事には、たくさんの人手が必要になります。町の人々が工事現場で働いて賃金をもらえば、生活がきっと楽になるでしょう。今こそ、用水工事を始めるべきではないでしょうか。」

善右衛門のうったえは議会でも認められ、明治三十九（一九〇六）年四月四日、ついに角田用水の工事が始まりました。

工事現場では、五百人以上の人が働きました。手作業で土をほって運ぶ工事は大変なものでした。岩が固くて一日にほんのわずかしか進められないこともありました。途中、作業の困難さから工事期間がのびて資金が足りなくなったとき、善右衛門は、自分の財産を差し出すことを申し出ました。その熱意が議会にも伝わり、予算の追加が決定しました。そして、一年におよぶ工事もついに完成の日を迎えたのです。

凶作…作物のできがとても悪いこと。

天候不順…天候が安定しないこと。

明治四十（一九〇七）年三月二十九日、初めて丸森から角田への用水に水が流されました。たまっていた泥を押し流しながら、勢いよく水が流れました。

「水だ。水が来たぞ。」

待ち構えていた人々は、清らかな水が目の前の堀をいっぱいにして流れていく様子を見て歓声をあげました。肩をたたき合う人、喜びをおさえきれず、水を追って走り出す人もいました。

この日は、午後六時から上水委員や役場職員など十数名が楽隊とともに角田用水の通水を町内にふれまわりました。楽隊に続いて歩いた善右衛門は、用水の流れと町の人々の笑顔を交互に見つめながら、何度もうなずきました。

この後、大沼や赤沼などのため池が干拓され、善右衛門が話していたように豊かな水田に変わりました。角田町は、善右衛門に「上水」の二文字をおくりました。今でも人々は尊敬をこめて善右衛門を「上水翁」と呼んでいます。

上水翁の銅像

高山 善右衛門

高山 善右衛門は、文久三（一八六三）年に角田（現在の角田市）の裕福な家に生まれた。当時の角田は、農業用水としての水不足が深刻な状況であった。そこで、善右衛門は自分のお金を出してでも用水を作りたいという強い意志で工事に取り組み、全長約六キロメートルの角田用水を完成させた。以来、地元角田市の人々は、善右衛門を「上水翁」と呼び、現在でも尊敬している。